

ユニバーサルファッション研究の動向

A Trend of research in Universal Fashion

富 田 玲 子

Reiko TOMITA

はじめに

1990年、すでにアメリカでは障害者に対する差別を一切禁止し、社会参加の条件整備を政府と民間企業とに義務づけたADA法（アメリカ障害者法）が制定された。デザインにおいてもこの考え方に呼応してユニバーサル・デザインが注目されるようになった。アメリカ・ノースカロライナ州立大学のユニバーサル・デザイン・センターの所長だったロン・メイス教授によって提唱されるようになったといわれている。この「障害のあるなしや年齢、性別にかかわらず、だれにでもよりよいものを」としたユニバーサル・デザインという言葉が日本において頻繁に使われるようになったのは1999年ごろからである。

ファッションにおけるユニバーサル・デザインをユニバーサルファッションという。当然のように日本では世界に類を見ないほどの超高齢社会、そして障害者の社会参加の機会が増えるという認識が高まる中、ファッション業界でも1999年には非営利団体のユニバーサルファッション協会が発足し、すでに10年が経過した。20世紀のファッションにおいては、健康な若年層を対象にしてきた業界も、やはり高齢者や加齢による身体機能の低下したすべての人々の快適な暮らしを実現させようと、年齢やサイズ、体型、障害などに関わりなく快適な衣服の制作、いわゆるユニバーサル・デザインによる商品開発が行われてきている。しかし、日本で生み出され既製服業界の発展とともに、1970年のJIS（日本工業規格）によるサイズ9 ARが標準とされた「9号伝説」は、21世紀を迎えた今もお息づいているのが現状である。現在までに、特に高齢者を対象にしたユニバーサルファッションに関する研究は、どのような視点でどのような問題について行われて来たのであろうか。また、今後どのようなことが問題になってくるのか。

そこで本論は、「ユニバーサル」「ファッション」「高齢者」をキーワードに、この10年間に発表された学会誌、大会発表要旨集、研究紀要から抽出された論文について整理を試みた。論文の検索は、CiNiiと雑誌記事を用いた。その結果1月6日時点で35誌59本の研究が抽出された。それらについて、その内容に基づいて分類を行ったところ、大きく5つのグループが見いだされた。

第1は、ユニバーサルファッションの現状と課題、意義に関する包括的研究である。第2は、高齢者の衣生活意識および服装に対する関心に関する研究である。第3は、高齢者のためのファッションショーが高齢者にどのような効果をもたらすかに関するものである。第4は、ユニバー

サル・デザインの提案および商品開発に関する研究である。第5は、ユニバーサルファッション教育のあり方に関する研究である。むろんこれらは、5つのカテゴリーに明確に分けることは難しいため、2つの領域で取り上げられた研究もあった。

I ユニバーサルファッションの意義に関する包括的研究

見寺貞子(2004)は、ユニバーサルファッションの意義と実現についての問題点について論じている。「現在の標準サイズや体型に当てはまらない人々に目を向け彼らの特性やニーズ、ライフスタイルからユニバーサルファッションを視点とした商品企画および普及を行うことにより新たな市場開拓と人的効果を得ることができる。」それは、それぞれの立場の人がそれぞれの役割を担って、「個人尊重」の視点からの環境づくりやものづくりなどノーマライゼーション社会の実現を目指して活動を勧めていくことが重要である。21世紀は、デザインコンクールによる試み、コラボレーションによる研究開発など参加参画を基本として生活者・市民の反映した「民・産・学・官」連帯体制でユニバーサル社会の実現を目指していきたいと考えている。また、だれもが楽しめる装いのデザイン提案として衣生活におけるユニバーサルデザインの実現に向けての問題点を抽出する。これらは、今後のファッション環境のあり方を示唆するものであると述べている。

高橋澄子, 阿川周子, 長濱康高, 植山愛子, 本島雅代(2005)は、ファッション教育の現場から、業界を支えていく若者に対して、ユニバーサルファッションの意義とファッションの歴史的背景, 学生の感想も加え今後のアパレル業界へ提案していくことを記述している。

坂口昌章(2005)は、ユニバーサルファッションの普及がもたらす悪影響および今後の課題について論じている。「ユニバーサルファッションは、一時期ファッション業界の衆目を集めながら、現在はあまり関心を持たれていない理由として、ユニバーサル・デザインという思想を正確に理解しないまま、時代のトレンドとしてユニバーサルをあつかったことにあるのではないか。ユニバーサルファッションの第一歩は、きめ細かいサイズ展開とされたことが、日本の既製服が抱える問題点であった。民族衣装, Tシャツ, ジーンズといった分野は既存の洋服よりもユニバーサル・デザインの思想を持っている。こうした研究も不可欠だろう。バリアフリーとユニバーサル・デザインは全く異なる概念であるにもかかわらず、バリアフリーは古い、これからはユニバーサルだ、という誤解が一般化し混乱が生じた。今後の課題はユニバーサルウェアの開発とバリアフリーのファッション商品開発である。」と論じている。

岸本義弘(2003)は、ユニバーサルデザインの足跡からユニバーサルファッションが示す将来の指針まで論じている。21世紀デザインの方向性として、高齢化の進展に伴い、だれもが共有できるデザイン, ユニバーサルデザイン, ユニバーサルファッションが必要である。日本文化の中に見るユニバーサルファッションの源流として、70年代日本人デザイナーの活躍, 日本の民族衣装としての「きもの」, 「もの作り概念」の再考, そして付加価値の高い精巧な「ファッションウェア」への定着が重要であることを示している。

織田 晃（2008）は、オートクチュールの復活と古着の再生が重要であることを示唆している。アパレル業界のユニバーサルブランド化、教育機関においてもユニバーサルファッションの講座など広く取り入れられている。一方では、機能性重視でファッション性に乏しく着たい服がない。マーケットが小さく普通の商店と変わらないなど、メーカー、売り場、消費者からユニバーサルファッションへの不満が寄せられていることは少なくない。「2007年NPO法人ユニバーサルファッション協会は、①安全性（怪我、肌荒れなどの管理と保証） ②耐久性（摩耗、色落ち、破損などの管理と保管） ③簡便性（気易さ、扱いやすさ） ④快適性（着心地の良さ） ⑤情報公開（産地表示の徹底）の5つを5原則としている。」ことを示している。教育現場では、トレンドにのった新商品とヴィンテージをリメイクした古着とどちらがおしゃれかの質問に学生回答者125人中84人が選んだのがリメイクした古着であったという。また、パリコレクションでは一頃衰退していたオートクチュールが盛り上がっている。地域限定、ショップ限定アイテムや百貨店でのカスタムメイドスーツも少しずつ伸びている。多大な時間をかける手作業を売り物にする商品も増えている。カタログに価格ではなく時間を記入するブランドまでも登場しているなど、古着の再生やマルタン・マルジェラのリメイク服が話題になっていることが示された。

伊藤陽子、久保村里正（2006）は、ファッション産業の歴史と現状および今後の岐阜ファッション産業の発展に向けて団塊世代のファッションの提案として「高齢者市場の活性化に関する調査研究報告書」を踏まえながら論じている。財団法人岐阜県産業経済振興センターの研究會では、委員会の構成を川上、川中、川下の3部門から代表者を委員として選び、ファッション産業のフィールド調査を行った。単に有名な商品の「ブランド」ではなく「優れた素材、優れたデザイン、優れた技術力による高品質としての製品を作り出すこと、基本的なことを疎かにしないことが「ブランド」として重要であることが示されている。

西弘樹（2008）は、「服育」の視点からアトピー性皮膚炎を考えると題して、学校制服の現状と課題、現在のアトピー性皮膚炎の生徒への対応、アトピー性皮膚炎を通して見えてくる今後の学校制服について論じている。学校制服の衣服で苦しんでいる着用者に対して繊維関係者がどのような協力ができるかということである。学校制服企業間、各学校、教育委員会、中央省庁、医療機関、さらに当事者の方々の協力が必要であることが示されている。

高森壽（2004）は、ユニバーサルファッションの視点から見る既製服の問題点として女子学生とその母親世代を対象に調査結果を要約している。既製服に対する不満については、サイズ・体型・デザインにして世代間の差が多く見られた。「若者向け商品はファッション性が高く、デザインのバリエーションが豊富であるのに対し、対象年齢が高くなると地味でデザインの選択幅が狭くなっていることなどが、関係していると推察されるとともに自己のサイズや体型に合った衣服を着用することの快適さ（着心地の良さ）に対する認識が世代間の差がある。」と述べている。また、学校教育において被服製作実習が極端に減少している現状を消費者教育の視点からも問題があると指摘している。

II 高齢者の衣生活意識および服装の関心度に関する研究

田岡洋子, 高橋壽, 井澤尚子, 斎藤祥子, 椋梨純枝, 青木 佳, 高木くに子 (2006) は, 高齢者の生活意識と衣服環境についての調査を行った。対象は, 北海道から九州の 8 地域に居住する元気な高齢者であった。因子分析を用いて, 生活やファッションについての意識の構造を明らかにするとともに, それらについての地域差, 年齢差, 性差が検討された。

山崎 真美 (2008) は, 誰もが衣生活を楽しむことができる環境の実現を目指して「高齢者・障害者の衣服に対する隠されたニーズを引き起こすことによって衣生活の意識を高め, より充実した衣生活の実現に近づくことができる。」という研究仮説をたてて論じている。特に女性の障害者はまわりの人の目に敏感であり, 障害者に対する偏見や差別を払拭するために衣服で自己表現する。衣生活と差別と偏見を関連づけている。

美馬朋子, 山本和枝 (2001) は, 服装色の嗜好性について論じている。アイテム別の特徴が見られた。ジャケットパンツ, スカートの黒が一番多い。中でもパンツは50%以上と落ち着いた色の服が多い。

南涼子 (2005) も同様に別の視点から論じている。色彩の役割, 色彩と人間の関わり, ユニバーサルファッションにおける色彩, 内面を表現する外見づくりとしてのエイジレス化と色彩, ファッションの選択肢を広げる色, ユニバーサルファッションの幅を広げる色について述べている。個々が美しく輝き, その人らしい色彩が表現されることが重要で, ファッションに限らず, メイクアップ, ヘアスタイルまで含めた包括的な装いであると示している。

門田真牟子 (2003) も同様の事柄を別の視点から論じている。高齢者のファッションと色をテーマに, 若者や熟年層ファッションにおけるアンケート調査および色彩評価を 4 地域において調査実施した。他人が快適と感じる色彩傾向は, 色相に関係なく上下同色か同系でまとめ, ウォーム系, クール系を統一し, 個人に似合う色を着ることであることを明らかにしている。

小田巻淑子 (2002) は, おしゃれの関心度や色の好みなどと関連づけながら, 高齢者の既製服 (外出着) に対する意識調査を行っている。外出着購入時における留意点として色, デザイン, 柄など審美性が60%で着用感の16%を大きく上回る。既製服への不満や要望, 手持ちの外出着の多い色は地味で落ち着いた色調が多いが, 着てみたい色はさえた赤, 明るい赤紫, 明るい緑みの青など明るい色調である。黒や暗いグレイなどダークな色調とさえた緑やさえた赤みのオレンジなどビビットな色調を好んでいるということを明らかにしている。

泉加代子 (2002) は, 高齢者の着装感情や服装への関心度と日常生活・健康状態との関係について, 「服装が健常な高齢者の精神的健康を維持・促進する効果がある。即ちファッションセラピーの可能性を探る」ことを目的に健常な高齢者男女770名を対象に調査した結果を論じている。「服装の評価によって生じる肯定的感情は, ふさわしい, 着たいと評価されると生じる。目立つ, 華やかは肯定的感情が生じる反面, 恥ずかしい, 落ち着かない気分も生じ, 他者の視線を気にしていると推察される。地味な服装は否定的感情を誘発し, 高齢者の精神的健康

の促進を阻害することが示唆された」。着装感情と態度や行動の変化との関係では、肯定的感情がおしゃれ意識を高め社会的になり積極的に行動するように、服装によって気分が変わると態度や行動も変わることが裏付けられた。服装関心度について、「自己意識や自立への意欲、心身の健康状態」との関連が認められ、良い気分を誘発するような服を着装することにより、服装への関心が高まり、高まると自己意識や自立に対する意欲の高揚、精神的・身体的健康の維持促進の効果が期待できると述べている。

箱井英寿、上野裕子、泉加代子、福岡 治、田中優（2001）も同様に、高齢者のファッション・セラピーに関する基礎的研究を行っている。高齢者が服を着替えることによる心理的效果を検証している。また、実践的な試みとして高齢者を対象にした施設でのファッションショーなど一連の研究結果から、服を着ることにより着装者の感情を肯定的な方向へ活性化させ、自己意識を高め、積極的に行動する意欲を高めることに示唆を与えている。

上野裕子、箱井英寿、小林恵子（2001）も同様に、「高齢者のファッション・セラピーに関する基礎的研究」を健常型老人ホームの入居者を対象に面接調査・質問紙調査を行い、さらに実践的な試みとしての施設でのファッションショーの企画・実施について報告している。記録は、2本のビデオを舞台と客席に焦点を合わせすべてを収録した。モデル・観客にインタビューを行い、ファッションショーを実施することで、情動が活性化されるかどうか。それは、どのような内容と方向性を持った情動であるかを検討した。

小林茂雄（2000）は、「老人ホームで介護にあたっている施設へのアンケート調査を行い、入居者の生きがい感や情動の活性化、おしゃれ意識や衣生活のあり方などに対する考えや実情を調査した研究結果」を報告している。ファッションショーや化粧行動は情動の活性化の効果を上げている。精神的な衰えの防止、情動の活性化に対して装いなどのおしゃれ行動の効果が注目されてきていることを明らかにしている。

片本恵利、木村大生、西尾新（2000）は、シルバーファッションショー出演者の被服に関する自己意識の変化について考察している。装う本人の周囲の者が心から「素敵、似合っている」と思える被服を身につける「場」をつくることこそが重要であると論じている。高齢者の心理に及ぼすことが重要になって、高齢者がいきいきと暮らせる真の高齢社会の実現に向けて我々ができることではないかと述べている。

泉加代子（2000）は、ファッションセラピーの可能性として、「健康な高齢者を増やすために衣服が貢献できるはずであるということを老人ホームでの調査と公開講座における発言を例示し、大学改革における被服学の新しい切り口を提言している」。健康な高齢者の健康づくりに衣服が貢献できると考えられる。人間が人間としての尊厳を持って生きるために衣服は不可欠のものである。「装いが高齢者の精神的健康を維持・増進する効果、すなわちファッションセラピーの効果を実証していくことが被服学の新たな切り口になるのではないかと。高齢社会において被服学はもはや家政学の枠にとらわれることなく、社会系の福祉やコミュニケーション学科、医学や介護などの領域でも存在意義がある学問となり得るのではないかと」論じている。

泉加代子（2006）は、ファッションセラピーが心理療法の一つとして普及することを目指して研究を続けている。事例研究として、介護老人保健施設入所の高齢者を対象に、①当日の健康状態および着用している衣服について自分で選んだか、好きですかなど ②服装写真を切り抜いてグレーの画用紙に添付して10数枚見せて、好きか、着てみたいか、③所持する衣服をボディーに着せ、コーディネート提案や着装アドバイス ④対象者が気に入った衣服を顔に合わせる。着装してもらい全身写る鏡で見せる。オプションで化粧2回実施した。ファッションセラピーの効果を持続させるために家族や介護者の日常的な着装アドバイスが必要であることが示唆された。

Ⅲ 高齢者のためのファッションショーが高齢者にどのような効果をもたらすか

1. ファッションショー

見守貞子（2000）は、「高齢者、障害者のためのファッションショーのデザインコーディネーターを担当し、観客に対して日常のおしゃれの関心度、日常着の選択基準結果とモデルに対して試着調査をした結果」を述べている。1997年兵庫県立リハビリテーションセンターにおいて、おしゃれが楽しめる生活環境を目的として「ひとにやさしいファッションデザイナー・高齢者・障害者のためのファッションショー」を実施した。本企画に参加した29名のモデル、約1300名の参加者、50名のスタッフにおける意識変化や要望についてのアンケート調査を実施した。デザインの提案はもちろん、ファッションショーの構成演出は、日常生活の4シーンをテーマにデザインのポイントをわかりやすくナレーションを入れて解説している。ファッションの評価、試着調査、出品作品の評価を行い報告している。社会をとおして人間とのかかわりを体験した中から「ノーマライゼーションの理念に基づいたファッション・デザイン」を普及していくことが重要であるとし、美しさや機能性快適性を求めるのは当然のことである。お化粧をし、おしゃれに装い社会に対して自己表現を行うことは高齢者・身障者の自立と尊厳を促し、生きることへの自身につながると主張している。

吉野鈴子、明石淳子、橋本篤孝、真鍋るみ子（2003）は、施設の高齢者が「おしゃれを楽しむ、おしゃれに関心を持つような衣服とはなにか、どういう衣服が受け入れられるのか」の観点からショーの衣服の評価を行い、モデルの意見、ショーでの観察、ショー後の衣服に対する関心の変化について考察している。ショー向きに企画した衣服は、市販品から選択した10点とオリジナルに製作した11点の21点、である。実際にショーに採用した衣服は「高齢者の顔がいきいき見える色使い」6点、「不自由さを軽減でき自立した生活に役立つ」を3点、「手作りの温かさを感じる」4点、計13点（内市販5点）である。ショー後、「ショー時に着用した衣服とおなじものを探す」など衣服に対する関心度がより高まった。これらは、魅力的でまた装いたいという気持ちを引き起こすものであり、高齢者におしゃれを楽しむことやおしゃれに関心を持つことに多少の貢献を果たしたと述べている。

山田泰子（2000）も同様に、一般高齢者とシニアファッションショー出演モデルの意識度を

比較している。出演モデルとショー出演経験のない一般シニアの服飾やおしゃれ・異性への関心度・異世代との交流・生きがいなどに関する意識調査を実施した。シニアにおいて「着る」と「装う」ことの認識が不明確であった。装うことは、被服をとおして間接的に自己表現をしたり、より強い客観性や主体性が加わる。シニアは年齢を強く意識するあまり年相応の装いが、没個性につながる。「気を張って装うという気持ちが一種の活性化につながったように思う。常に気を張って他人の目を意識しながら装うという気持ちを持続するには、相当の努力とエネルギーを要する。装うことを自分自身の楽しみにすることであり、自分のために装うこと」と述べている。

山岸裕美子（2002）も同様に、高齢者のよき思い出と装いと題して、特別養護老人ホームにおける衣服をテーマにした回想法の実施とそれに基づくファッションショーの試みを論じている。出演者の装いについては、すべて自身が所持している自分で選んだ「思い出に残る衣服」を使ってのコーディネートをしている。化粧を施し、顔の表情を明るくしてBGMで効果的に盛り上げ、さらに施設長、生活相談員、事務長にエスコートを依頼するなど、利用者の人生の足跡にもう一度スポットライトを当てて華やかに彩り、それを施設全体で受容することが望まれるとした。

松本由香（2007）において取り上げられたのは、「ユニバーサルファッション・プロジェクト」の最初の催しである、オープンキャンパスにおいて行った公開講座である。身体に障害のある人が着やすいウェディングドレスのリフォームの仕方についてやユニバーサルファッションをテーマにしたワンピースやシャツの作品紹介を示しながら、ユニバーサルファッションとは1枚の布、靴のオーダーシステム、フリートーク、それぞれの個性を表現しておしゃれを楽しむことが、自己を確立し、個人を尊重する考え方につながることを論じている。さらに人権フェスタ2006でユニバーサルファッションショーを開催した。テーマは、「人の生活・暮らし」で、舞台は「ある日の公園」を想定した。マタニティー・ウェディングや土佐袖を使った一枚布で作ったベビースリングで赤ちゃんを抱くお父さん、安全スモックを着た幼稚園児などが登場、高知丸の内高校の生徒がリフォームしたカラー・ウェディングドレス（ワンピースタイプからツーピースになって、身体に障害のある人が着脱しやすいデザイン）など30着を着て紹介したことの報告がされている。

松本由香（2008）は、「高知における衣生活の現状課題についての実践的研究として、ユニバーサルファッションの考え方が、高知の人々の暮らしにどのような意味を持ち、どのような生活改善の可能性をもつのかについて考察している。」2002年～2007年まで、1）障害者・高齢者および健常者への衣生活意識についてのインタビュー調査と高知市中心部の衣料品点でのインタビュー調査、2）調査結果を踏まえた衣服の製作と評価、3）ユニバーサルファッションをテーマとする公開講座とファッションショー開催の実践的研究の結果から、衣服を装いおしゃれすることが、高齢であったり障害がある人をより健常な状態にさせ、人々の自立・共生・連帯を促す力を持つものであることが明らかにされた。

箱井英寿, 上野裕子, 小林恵子 (2002) では、「ファッションショーが高齢者に与える心理的効果を検討することを通して、装いのセラピーへ向けて基礎資料の収集を試みている。」調査1では、二つの会場で実施したファッションショーに参加した高齢者を対象に、その経験と被服意識や行動意識などとの関連について、調査2では、モデルとして参加した高齢者の半年後の被服意識と行動等の変化について検討している。その結果、モデル参加を希望する群は、観客参加を希望する群よりも気分変化の被服意識や日常生活における被服への取組が積極的に行なわれ、半年経過後も服を積極的に着替えることによる効果や被服を通して広まった対人関係などは維持されていることが明らかにされた。

上野裕子, 箱井英寿, 小林恵子 (2002) は、高齢者の情動活性化に衣服・着装がどのようにかわり貢献できるかという視点から事例研究として、京都市老人福祉センターと被服社会心理学研究会との共催で高齢者ファッションショーを実施した。モデル、センターの指導員にファッションに関する感想・印象などについて尋ねた。高齢者は自由記述、指導員は聞き取り。ショーに対する意見は、楽しかった、嬉しかった、おしゃれは生きる力を実感した。高齢者の情動の活性に刺激となり得ること継続して実施することが日常生活の目標や生きがいに繋がり高齢者の情動活性化に貢献できることを示唆している。

箱井英寿 (2005) は、ファッションショーのビデオ鑑賞が高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果を学生がどう捉えるかを検討した。衣服が高齢者の精神的健康を促進する実際効果、いわゆる「装いセラピー」の可能性を検討するためのものである。被験者は、大学生103名である。ファッションショーのビデオ鑑賞前後のショーへの参加意欲度の分布から、一貫してポジティブな群、ネガティブからポジティブに変わった群、一貫してネガティブな群の3群に分けた。これらの群間でモデルとなった高齢者の被服意識や行動をどのように受け取ったかの違いを検討した。高齢者モデルの「おしゃれ意識」「他者比較意識」「自己変容意識」被服に関連した行動、地域活動への参加などの3群間の差異を分散分析により検討した。一貫してネガティブ群は否定的な受け止め方をし、ポジティブな群は肯定的な方向への受け止め方をしていた。ネガティブからポジティブに変わった群は、ポジティブな群よりも被服への取組や被服以外への取組を実行していると受け止めていることが示唆された。

田中直人, 見寺貞子, 坂田岳彦, 小山美代, 水谷真一郎 (1999) は、ひとにやさしいファッションデザインをテーマにした、高齢者・身体障害者のためのファッションショーの企画と評価を行っている。すべての人にやさしく魅力的なファッションデザインを実現するための試みとして1997年10月兵庫県立総合リハビリテーションセンターにおいて「ひとにやさしいファッションデザイナー-高齢者・身障者のためのファッションショー」を行った。参加したモデルの生活環境および衣服に関する問題点と要望に基づいてデザインし、ライフシーン別にファッションショー形式で提案したものである。さらに作品の展示を行い、終了後も福祉用具展示ホールにて2ヶ月間作品展示を継続した。この他、ふれあいフェスティバル'97第9回兵庫のまつり-ふれあいの祭典の特設会場においても作品展示と説明会をおこなった。企画概要、デザインプ

ロセス、デザイン提案と実施（モデル選定、デザイン提案、ファッションショーの構成および演出方法、作品展示）、企画の評価（アンケート調査、ファッションショーの評価、出品作品の評価、ファッションショーによる意識の評価、今後のファッションショーへの期待）、試着調査（出品作品の評価、色について、素材について、デザインについて服種について）、社会マスコミ等の反応、モデルとしての意見などを説明した。おしゃれの意識については、関心はあるがしていない人がほとんどであった。その結果、ショー会場や環境に対して高齢者や障害者の身体機能を考慮したひとにやさしいイベントの展開方法を考える必要があること、高齢者や障害者ほど自己の身体機能に対応した実用的で機能的でおしゃれな衣服が必要であることを主張している。プロジェクト活動については、モデル参加者、学生、県職員中心のスタッフと生活環境の異なる人達がプロジェクトを結成してのファッションショーは、すべての人が感動し思い出に残るプロジェクトであったこと、今後社会をとおして人間との交わりを体験した中からノーマライゼーションの理念に基づいたファッションデザインを研究していくことが重要であることが示された。

2. コーディネート

山岸裕美子（1999）は、特別養護老人ホームにおけるファッションコーディネート働きかけとして、衣服には、物理的機能と精神的機能があり、後者は、実用性はもちろん色、形、文様、素材などの要素から成り立っており、どのように着るかは、個々人がその美意識により選択すること、衣服を装うことで「自己表現」を行う精神的機能に着目し、特別養護老人ホームの利用者に対する装いの工夫を行うことを提案し、その援助を試みた。さらに施設内で着ている衣服は、入所前から着ているものを持ち込んだケースが多いことから歴史、思い出がある衣服を施設利用者が自らの服装を考え装うことは、内的充実感と活気を見いだすことになること、衣服というモノではなく、コミュニケーションを通して衣服を装う「思い（想い）」に重点を置き、それが生きがいにまで発展していくのではないかということについて論じた。

山岸裕美子（2000）は、自然感情を中心とした試みとして、「特別養護老人ホーム入居者2名に対し、装いの工夫の働きかけを実施して日常の様子を経過観察し、働きかけ前と後の様子について評価している」。高齢者が現在所持している衣服を用い、ファッションコーディネートを中心とした装いの工夫をし、コミュニケーションを通じて衣服を装う「思い（想い）」に重点を置いている。「コミュニケーションを通じ、ケア利用者と深遠な精神世界を共有し、共感しあう努力をするべきである。日常生活の中に美を発見することのできる感受性を養うとともに四季の移り変わりの中で育まれた我々の文化についての素養も培っておくべきではないだろうか」と述べている。

3. 化粧

大坊郁夫（2002）は、化粧をすることによる表現と解釈の基本的働きを、対人関係運営のスキルとしてとらえ、化粧の持つ心理的効果の可能性を論じている。他者から高い評価を得られることによる満足感は重要である。多くの人が日常で意識している以上に「自分のため」と

「社会性」とが連続的な関係にあるものと言える。すなわち「対人関係を円滑に運営するのに有効な『社会的スキル』の表れなのである。高齢者にとって、経験のあるなじみやすい、コストの少ない化粧は手軽に自分を表現し、自分の活力を見いだせる有効な方法である」ことを明らかにしている。

宇野賀津子（2002）も同様に、高齢女性に対する化粧療法の効果として、老人病院に長期入院している患者を対象に化粧を治療の一環として積極的に取り入れる計画を立てて論じている。入院中の女性の化粧は顔色の判定ができないなどの理由により禁止されることも多い。しかし、安定期にある患者においては化粧の患者の前向きな効果を評価し治療に積極的に取り入れるのが望ましいと考えられる。多くの長期療養型病院は共通企画のパジャマ使用の強制など、患者の個性を否定している。このような中で、病室内での化粧の推奨は、自己主張の場を提供しリハビリ訓練として、自己の個性発揮する手段として、ひいては生きる意欲を引き出す可能性を持った治療法となるものと示唆された。

伊波和恵、浜治世（2000）も同様に高齢女性と化粧－化粧の臨床心理学的適用の方法および実践－と題して、高齢女性と化粧のかかわりについて、アンケート調査の結果に基づき論じている。また、老人保健施設において、自他ともに変化を実感しやすい装いとしてのメーキャップ化粧に焦点を絞り考察している。

IV ユニバーサル・デザインの提案および商品開発

1. デザインの提案

見寺貞子（2000）は、ファッションにおけるバリアフリーデザインに関する研究として、高齢者・障害をもつ人の意識に基づくデザインを提案している。97年10月から20年までの衣生活に関する意識調査をもとに衣服着用に関する問題点や要望を分析考察している。日常生活行為の自立度、日常の外出目的、おしゃれの関心度、着用している衣服について（衣服の選択者、衣服の素材、衣服の柄、衣服の色相、衣服の型、既製服の問題点）、さらに、今後着用したい衣服について（既製服の選択基準、今後見られたい自己のイメージ、今後着用したい色相）、ヒアリング調査（素材について、デザイン、体型、色相、ファッション性、安全性について）などにより、様々な問題点や要望が抽出された。今後、高齢者・障害をもつ人に配慮した衣服デザイン（身体状況を配慮した衣服デザイン、機能性を配慮した衣服デザイン）を提案していくことを述べている。

山岸裕美子（2002）は、芸術作品を用いたアクセサリーの製作とそれを中心とする装いとして、高齢者の知的満足感を伴うおしゃれによる変化を論じている。古典的名画とされる絵画作品等のモチーフを用いたブローチの製作を行うことと、さらにそれを着けて装うことを提案している。活動による変化を評価するために高齢者7名を対象に「N式老年者用精神状態尺度（NMスケール）」を用い働きかけの前と後にそれぞれの点数化も試みた。ただ単に上衣と下衣の組み合わせによるおしゃれを考える「感性」だけではなく、そこに芸術を身に着け装うとい

う「理性」の要因を加えたことにより満足感が得られる。今日、絵画や和歌、俳句、謡、古典文学の購読など、高齢者によって様々な趣味や学習活動が行われている。そこでの成果を装いの中に何らかの形で生かし表現することができたら、「生涯学習」の分野で画期的な成果をあげることも可能なのではないかとされている。

杉野公子（2004）は、ユニバーサルファッションの可能性「加齢に伴う体型変化に関する基礎的研究-腕の付け根の寸法・形状と腕の方向-」を踏まえて、作品化および幅広い年齢層の消費者に対応できる生理機能も含めたデザイン展開を試みた作品製作を行っている。ここでは、「コートにおける若年女性と高齢女性の体型的特徴の融合」と「生理機能を含めたデザインの展開」の2つをテーマに製作した作品が示されている。コートの前身頃のサイドダーツをショルダーダーツへと展開したダーツは、高年女性ボディーの着用状況を見ると身頃に皺がでるなどの問題はなかった。また、袖についても後ろ身頃の背中丸みを出すためにとられたダーツも弱年女性ボディー着用では美しいドレープを出した。袖についても同様にそれぞれ自然に袖が振られているように感じる。生理機能を選択できるサマージャケットでは、デザインのポイントとしての「通気孔」の採用は、「汗をかく」「あまりかかない」「かかない」という多様な人間の生理機能に関する選択の幅を広げることに一定の成果を上げることができたと報告している。

猿田佳那子、三木沙織（2006）は、車椅子使用者の衣生活環境改善のために求められるファッションもユニバーサルデザインの考え方が必要とされてきていることが示されている。ユニバーサルファッションの基本は、年齢やサイズ、体型、障害に関係なく、だれもがファッションを楽しめる社会を目指すことである。現在の既製服市場は、身体的障害をもつ人々の需要に対応できていない。ここでは、4名の身体障害者への聞き取り調査から問題点を絞り、解決の糸口を見いだそうとするものである。具体的な要望に基づいて、リフォームを試みたところ、専門的な技術が必要なのではなくて、個々の事情を理解して対応策を考えることに知識と技術を要することがわかった。当事者からの情報発信の重要性は、アパレル企業の取組や販売店など社会環境の問題解決にも言えることであると論じている。

粉川輝子（2005）は、高齢女性の体型と衣服の現状調査および高齢女性の体型に配慮したユニバーサルファッションを提案している。試着実験と検討を重ね、データをもとにパターン修正を行い、意見聴取のもとに着心地とデザインの両面から検討し、ブラウスを製作した。また、2003年高齢者施設の地域交流センターで世代を超えたユニバーサルファッションショーを実施している。高齢者の体型調査と重心動揺調査のワークショップとして、ユニバーサルな視点での提案となった。また、スカートのマテリアルとして使用済みのコーヒー豆のジュート袋を使用しリユース・リデザインのファッションを行ったことの報告が示された。

栗田佐穂子（2008）は、衣類が心をつなぐ「ユニバーサルファッション」として、ユニバーサルデザインの服飾雑貨、デザインのポイントとなるボタン、ボタンホールに留めやすいボタン、紐を引きやすくした補助具、ループがけ専用ボタンソフトボタン、コンシールファスナー

の弾き手カバー，バンダナで作る帽子やショールで作るボレロ，着替えが簡単で外出がおっくうにならない服としてのストールをリメイクしたポンチョなどを提案している。

金谷喜子，遠藤夕佳子，渡邊尚美（2003）は，被服教育の中に取り入れることで若者の理解と積極的参加を期待するとともに若年者と老年者との密接な共生の時代を創造することを目的にその取組を論じている。ユニバーサルファッションの試作として市販の既製浴衣を直して着脱しやすく，おしゃれに変身できる二部形式浴衣と改良兵児帯を試作し，通常の浴衣着装の場合と試作品との着つけに要する時間および着装の状態を比較した。従来から利用されているものと新しいものと融合させる必要性があることを示している。

2. 商品開発

東レ株式会社「ナイスエージング」企画推進グループ（2002）は，高齢化に向けた高機能ファッション素材高齢者への優しさをデザインした。東レ「ナイスエージング」企画－介護する人（ヘルパー）される人（レジデント）双方の用品用具に求められる「清潔」「快適」「利便」「安全」の4要素に対し，制菌・消臭・吸湿発熱作用などを持つ高機能素材を開発し，介護用衣類やインテリア類の商品化を実現している。健常高齢者向けには，「ヘルスアップ（健康維持，増進）」をコンセプトにスイミング，ウォーキング，スポーツジム，旅行の各用途に商品を開発している。高齢化に対応したファッション素材および商品開発はフィールドテストを重ねて実用化している。使用者の意見・要望をくみ取ることの重要性は，「ユニバーサルデザイン」の原点ともつながると論じている。

山内寿美，山下典男（1998）は，高齢者や障害者が積極的に人生を楽しめるような衣服を機能面，ファッション性の両面からとらえ高齢者のための衣服を高齢者への調査などを経て研究し，着やすく，ファッション性に優れた製品を開発している。高齢者のためのバリアフリー衣服とは，若者と一緒に衣服を着ることではなく，身体形状を加味したデザイン・パターンが確立された上で様々な体型の高齢者が自由にファッションを楽しめる衣生活環境のことである。これは，百貨店で他の商品と一緒に並べられ販売されるべきであると示している。

山内寿美（2002）は，ユニバーサルファッションの動きは，協会の設立や大手アパレルメーカー・百貨店が参入するなど大きな動きが見られ，この手の市場規模は年間6,200億円とも言われていること，しかし商業ベースに乗せて利益を上げているところはほとんどなく，企画が自然消滅しているのが現状であること，衣服の不便さにおける現状調査をふまえたデザインと作品2点をとおして業界への問題提起，新分野開拓への先駆的な提案ができたことを示している。

坂本弘（2008）は，ユニバーサルファッション協会との共同開発として，着脱しやすく動きやすいユニバーサルファッションとして「からだに優しいポロシャツ」を開発したことが報告している。

V 被服教育のあり方と展望

長谷川えり子（2005）は、ユニバーサルファッション教育を短大の被服教育へ導入し、新しい視点からファッションを捉える実践方法について論じている。その中で、身体機能が低下した高齢者や障害者を対象とした商品の開発について、導入効果とその結果について報告された。その結果ADL（日常生活動作）における様々な問題点が明らかになった。疑似体験で得た不便さを応用して新しいユニバーサルデザインを発想して提案している。今後は、これらの実用性を検討すること、さらに被服教育の中で有効的な授業内容について模索することが示された。

橋本康子（2004）は、ユニバーサルファッションの視点から被服教育に関して考察している。「対象を広げて『だれをも受け入れるデザイン』とはどのようなものか。あらゆる商品は使用者の使いやすく美しいものという要望に添ったデザインを目指して動き出している。多様なひとびとの視点に立った衣生活、ファッションに対する期待は大きい。それぞれの立場で具体的な実践を探ることが課題であり責務である。」ということを示した。

中村威久水，我妻美奈子，嶋根歌子（2002）は、高齢者に適合した被服のパターン・デザイン・着装評価－被服構成・デザイン・生理学の3分野から21世紀における服飾造形学における教育と研究のあり方を論じている。「高齢者が自立するためのファッション設計を教育の中で実現すること。個人差、使用実態を考慮した高齢者に適合した被服のパターン・デザイン・評価法など」を検討している。比較的健康で介護を特に必要としない高齢者のファッションを機能性・心理的側面からの支援として研究したものを報告している。

おわりに

以上、ユニバーサルファッションに関する研究を概観した結果、ユニバーサルファッションは、基本的にオートクチュールであると言える。なぜならば、身体機能や障害など個人の条件は様々であるからである。それでもすべての人々が快適で自分らしい自己表現としてのファッションを追求するならば、オートクチュールにならざるをえない。実際、オートクチュールの方法論により作品製作をしてショー形式で発表された研究は、その作品の満足度、完成度の高さのみならず、高齢者自身の心理的特性や適応度にまで正の効果をもたらしていることが示されている。しかし、現実には一部の豊裕層を除いて経済状況などから実現はのぞむべくもない。一方、デザインの工夫により、すべての人に対応する服作りを実現する方向での研究にも、もう一つの大きな流れが認められた。和服からヒントを得たもの、2部式や着脱の工夫を加えたもの、体型を考慮したデザインなど様々な試みが見られる。これらの研究が、さらに進むことで既製服においてもユニバーサルファッションを実現させることは可能である。そのためには、今後さらに次の観点での研究が望まれる。

1. 高齢者や障害者の体型や身体機能に関する研究

今までもリハビリテーション医学や運動学においては研究の積み重ねがあるが、それらは、

必ずしもファッションを視野に入れたものとは言えない。美しく装うこと、自分らしく表現することと言った観点で、これらの研究が行われることが望まれる。

2. 産学官民の連携についての研究

ユニバーサルファッションにかかわる産学官民は、それぞれ異なる事情や立場を持つ。いくつかの試みが成功しているが、必ずしも一般的な状況とは言えない。産は経済的な成功、学は研究と教育、官・民は市民の幸福が課題となっている。それをともに実現させるためのシステムは、どうあるべきか。これらについて研究は充分とは言えない。

3. 世代差、時代差を考慮したデザイン

現在高齢者と言われる人達の中心は、もはや戦後生まれである。GSやビートルズ世代が高齢者には含まれている。当然、かつてイメージされていた高齢者とは、ライフスタイルや美意識、ファッションセンスにおいても全く異なっていることが予想される。しかしながら、この点について、十分に検討されている研究は必ずしも多くはない。従来の高齢者は、あるいはすでに若いときからファッションに必ずしも十分な配慮をできない時代を過ごしてきたせいかもしれない。今後研究を進めていく上では、つねにそのことを考慮することが必要である。

参 考 文 献

- 岸本義弘（2003）新世紀のさらなる胎動東京服飾造形短期大学紀要第4集
- 西弘樹（2008）「服育」の視点からアトピー性皮膚炎を考える繊維製品消費科学第45巻第8号
- 高森壽（2004）ユニバーサルファッションの視点から見る既製服の問題点月刊「家庭科教育」第七十八巻第六号
- 伊藤陽子，久保村里正（2006）岐阜アパレル産業に対する「団塊の世代」ファッションの提案 岐阜市立女子短期大学研究紀要第55号
- 坂口昌章（2005）ユニバーサルファッションの課題と問題点繊維トレンド（52）
- 見寺貞子（2004）これからのユニバーサルファッション繊維トレンド（47）
- 高橋澄子，阿川周子，長濱康高，植山愛子，本島雅代（2005）ユニバーサルファッション文化 女子大学研究論集5
- 見寺貞子（2004）ユニバーサルファッション都市政策117
- 織田晃（2008）成長神話崩壊の果てに見えてきた持続可能社会への移行ユニバーサルファッション研究部会
- 南涼子（2005）ユニバーサルファッションにおける色彩の役割繊維製品消費科学第46巻第1号
- 上野裕子，箱井英寿，小林恵子（2001）高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する事例研究繊維誌Vol42
- 美馬朋子，山本和枝（2001）高齢者ファッションに関する一考察月刊「家庭科教育」第75巻第8号
- 門田真乍子（2003）高齢者のファッションと色定点観測について日本色彩学会誌 VOLUME 27

- 田岡洋子, 高橋壽, 井澤尚子, 斎藤祥子, 椋梨純枝, 青木 佳, 高木くに子 (2006) 高齢者の生活意識と衣服環境京都短期大学紀要 Vol34
- 田岡洋子, 井澤尚子, 高森壽, 斎藤祥子, 青木 佳 (2007) 高齢者の生活意識と衣服環境京都短期大学紀要 Vol35
- 泉加代子 (2006) 要介護高齢者とファッション・セラピー日本衣服学会誌 Vol50
- 小田巻淑子 (2002) ユニバーサルファッションを考える東京服飾造形短期大学紀要第1集
- 山崎 真美 高齢者・障害者のユニバーサルファッションに関する研究
- 泉加代子 (2000) ファッションセラピーの可能性繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6
- 小林 茂雄 (2000) 老人ホームにおける衣生活とおしゃれ行動老人ホームにおける衣生活とおしゃれ行動繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6
- 片本恵利, 木村大生, 西尾新 (2000) シルバーファッションショー出演者の被服に関する意識繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6
- 泉加代子 (2002) 高齢者の着装感情や服装への関心度と日常生活・健康状態との関係繊維機械学会誌繊維工学 Vol.55, No.4
- 山岸裕美子 (2002) 高齢者のよき思い出と装い昌賢学園論集創刊号
- 箱井英寿, 上野裕子, 泉加代子, 福岡 治, 田中優 (2001) 高齢者のファッション・セラピーに関する基礎的研究第7回「健康文化」研究助成論文集
- 山田泰子 (2000) 服飾が及ぼす高齢者の意識変化と活力化現象 (第三報) 近畿大学九州短期大学研究紀要第30号
- 箱井英寿 (2005) ファッションショーが高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果大阪人間科学大学紀要第4号
- 吉野鈴子, 明石淳子, 橋本篤孝, 真鍋るみ子 (2003) 高齢者・障害者の日常生活動作 (ADL) 対応衣服大阪ソーシャルサービス研究紀要第3号
- 松本由香 (2008) ユニバーサル・ファッションと自立・共生・連帯高知女子大学紀要生活科学部編57
- 松本由香 (2007) 「ユニバーサルファッション・プロジェクト」の立ち上げと活動についてふまにすむす
- 箱井英寿, 上野裕子, 小林恵子 (2002) 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究 (第2報) 織消誌 Vol43
- 箱井英寿, 上野裕子, 小林恵子 (2002) 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究 (第3報) 織消誌 Vol43
- 田中直人, 見寺貞子, 坂田岳彦, 小山美代, 水谷真一郎 (1999) ひとにやさしいファッションデザイン神戸芸術工科大学紀要芸術工学'98
- 見寺貞子 (2000) ファッションにおけるユニバーサルデザイン繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6

- 金谷喜子, 遠藤夕佳子, 渡邊尚美 (2003) ユニバーサルファッションへの試み大妻女子大学家政系研究紀要第39号
- 粉川輝子 (2005) ユニバーサルファッションに関する研究大阪成蹊大学芸術学部紀要 Vol.1
- 猿田佳那子, 三木沙織 (2006) 車椅子使用者の衣生活環境改善のために求められること同志社女子大学生生活科学 Vol.40
- 栗田佐穂子 (2008) 衣類が心をつなぐ「ユニバーサルファッション」〈その1〉月刊福祉第91巻第8号
- 栗田佐穂子 (2008) 衣類が心をつなぐ「ユニバーサルファッション」〈その1〉月刊福祉第91巻第8号
- 栗田佐穂子 (2008) 衣類が心をつなぐ「ユニバーサルファッション」〈その2〉月刊福祉第91巻第9号
- 見寺貞子 (2000) ファッションにおけるバリアフリーデザインに関する研究. 神戸芸術工科大学紀要芸術工学'99
- 山岸裕美子 (2002) 高齢者の知的満足感を伴うおしゃれによる変化. 繊維機械学会誌繊維工学 Vol.55, No.4
- 山岸裕美子 (1999) 高齢者の「装い」行動による変化と「生きがい」. 第5回「健康文化」研究助成論文集
- 山岸裕美子 (1999) 高齢者の装いと生活文化. 群馬社会福祉短期大学研究紀要第2号
- 山岸裕美子 (2000) 特別養護老人ホームにおける装いの工夫の働きかけ. 繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6
- 坂本弘 (2008) 着脱しやすく動きやすい. 繊維製品消費科学第45巻第8号
- 山内寿美 山下典男 (1998) バリアフリーファッション製品の研究 (第1報). 岐阜県繊維試験場研究報告
- 橋本康子 (2004) 被服教育に関する考察. 月刊「家庭科教育」第78巻第12号
- 橋本康子 (2004) 被服教育に関する考察. 月刊「家庭科教育」第78巻第12号
- 長谷川えり子 (2005) ユニバーサルファッション教育の実践. 愛知学泉大学短期大学紀要第40号
- 中村威久水, 我妻美奈子, 嶋根歌子 (2002) 二十一世紀における服飾造形学のあり方 (第2報) 和洋女子大学紀要第41集
- 伊波和恵, 浜治世 (2000) 高齢女性と化粧繊維機械学会誌繊維工学 Vol.53, No.6
- 大坊郁夫 (2002) 対人関係のスキルとしての装い繊維機械学会誌繊維工学 Vol.55, No.4
- 宇野賀津子 (2002) 高齢女性に対する化粧療法の効果いくつになっても綺麗はすてき繊維機械学会誌繊維工学 Vol.55, No.4
- 杉野公子 (2004) ユニバーサルファッションの可能性杉野服飾大学杉野服飾短期大学部紀要 Vol.3